令和 7　年度　　園評価書

園番号　4　　園名　静岡市立安東こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）　評価基準(A：Aが80%以上、B：ABが80%以上、C：ABが60～79%、D：ABが～59%)

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
すすんで遊びを もっと つくる子	「やってみよう もっと やってみよう」	生活に必要なことがわかり、自ら行おうとしている	日々の生活習慣が身につき、自分から行ったり次の活動の見通しを持ち自分たちで準備したりする姿が増えている。一方で、生活や遊びの中で、身体を動かす経験が偏っており、こうすると危険ではないかと予測したり回避したりすることができず、転んだりぶつけたりするケガが多かった **正：B　会：B　家：B**	B	A	・コロナ禍に育ってきた子どもたちなので、体験が少なく、ケガが多いということにつながっているのではないか ・今、‘体験’が大事な時期。植物や生き物のコーナーなど、五感を使った体験が出来るのは良い ・数字、文字への関心は、「知りたい」「伝えたい」という思いから育っていく。そのおさえがきちんとできている ・表現遊びでは、一人一人の様々な表現があり、それを大事にしているのが良い。小学校のテーマともつながっている ・５歳児の『だいすきがいっぱい』という題材の絵画や、いろいろな表情で大きく書かれた鬼など、生き生きと描かれている	・身体の諸感覚を働かせた、多様な動きを楽しめるよう、運動用具の活用や、体を使った遊びを月の指導計画に取り入れる ・それぞれの‘もっと’を支えていくために、引き続き、‘出会い’‘経験’‘もっと’の図を使って一人一人の心の動きを捉え、その子に合った援助をしていく ・自然と生まれる異年齢同士の関わりを大切にし、相手の話を聞いたり聞いてもらったりする経験ができるようにしていく
		出会いや経験を積み重ねながら、好奇心や探究心を高めている	「面白い」「なぜだろう」といった体験(出会い)が心に残り、‘こうしたい’という思いを持ち、好きなことをじっくり楽しんだり周りから認められたりしたことがその子の良さとして伸びてきた。一方で思いがあっても動き出せない、失敗したくないという姿もあり、それぞれの‘もっと’を支えていくことが必要である **正：B　会：B　家：B**	B	A		
		友達と関わったり、力を合わせたりしながら、自分たちで遊びや生活を創りだそうとしている	友達と遊びたい、一緒だから安心できるという思いから、自ら関わり遊びを創り出そうとする姿が見られる。思いがぶつかったりうまくいかないことがあったりすると、遠慮して遊びが続かないことがあるが、自分の思いを言葉で相手に伝えることや、相手の思いも聞いていくとさらに遊びが面白くなっていくことに気づきつつある **正：B　会：B　家：A**	A	A		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	発達や子どもの姿を捉え、その時期ならではの経験を見通した指導計画が作成され、実践されている	各学年で子どもの興味や発達、その季節ならではの遊びなどを考慮して指導計画を作成してきた。月案作成時だけでなく日々の保育の振り返りや週案作成時にも‘出会い’‘経験’‘もっと’の図を使って子どもの姿をより細かく分析し、環境の再構成、関わりに生かしている **正：B　会：B　家：A**	A	A	・昨年度課題であった、正規職員と会計年度任用職員の評価の差が、なくなっている。９月、１月にワークショップ形式で行った実践の効果が出ている ・子どもたちの姿から、生活と遊びのつながりが感じられた ・発達が考えられた複合遊具（小学校のものと同じ作り）、鉄棒の下に置かれたタイヤ、なわとびを使って音楽に合わせ感じて踊る等、いろいろなことが経験できる環境が考えられている ・災害時、小学校のグランドに避難した方がよいというケースも想定されるのであれば、合同の訓練を行い、お互いにスムーズな動きができるような方法をとっていくことも考えている ・会計年度職員の「災害時の動きのマニュアルが欲しい」という声は、自分事として考えているからこそではないか。経験の少ない職員には、基本を提示し、‘こういう時はどう動いたらよいのか’‘何に困っているのか’をまず出してもらい、対応策、解決策を職員で考えていくことが必要 ・ひな人形の飾りつけ、節分の取り組みなど、家庭ではできないことを園で体験させてもらえてありがたい ・家庭での親子関係が難しい時代、‘園に相談してもいいんだ’と思ってもらえるような、家庭と園とのつながりが大事ではないか。また、きょうだいも少ない時代に、園では様々な年代の友達と関わることができるのが良い ・地域との交流を積極的に行い、地域の人たちに子どもたちのことを知ってもらえるとありがたい。地域の力も借りながら、子どもたちや家庭を支えていけるとよいのではないか	・より丁寧に発達やその時期ならではの経験を見通し、実践ができるよう、年齢ごとに月案会議を行っていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	教育時間と教育時間外の子どもの表れや思いの違いを職員間で共有している	伝達事項や子どもの表れについては職員間でメモや口頭で丁寧に伝え合い、情報を共有している。早遅番を利用する子や、外国籍の子なども増えているため、一人一人が安心して過ごせるよう、さらに園全体で子どもだけでなく保護者の状況を共有していく必要がある **正：B　会：B　家：B**	B	B		・在園時間の違い、在留外国人など、多様な状況の子どもたち一人一人が安心して過ごすことができるよう、職員会議等で子どもの様子や保護者の状況も共有していく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	準備から片付けまでが子どもと共に行なわれ、子どもが創る園生活が定着している	準備から片付けまでを子どもに任せすぎてしまったため、年齢や発達によって何をどのように準備しておくと子どもが自ら考え動き出せるか、職員で共有し、子どもと共に環境づくりをしてきた。‘やりたい’と心が動くと、必要なものを準備したり探したりする姿があるため、子どもが心を動かすきっかけとなる環境を再確認していきたい **正：B　会：B　家：A**	A	A		・‘やりたい’‘もっと’と心が動くために、どのような環境（量・種類・タイミング等）があるとよいのか、日々の保育や公開保育等で検証し実践していく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	安全確保（身を守る）について職員一人一人が想像性をもって対応している	南海トラフ地震を想定し、緊急地震速報や非常ベルの放送を使いながら緊張感を持ち、地震、火災の訓練を行った。子どもと共に状況をイメージし、起こりうる被害を考えながら避難することを意識した。しかし、減災教育の共通認識が甘く訓練内容に戸惑う職員もおり、全職員が自分事として捉えて取り組むことが難しかった **正：B　会：B　家：A**	A	A		・減災教育の考え方を取り入れ、形だけでなく‘考えて動く’訓練となるようにする ・時間帯や、予告のあり、なし等、様々な想定で避難訓練を行い、職員一人一人が動きや役割を考えながら行動できるようにしていく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	５歳児健診の意義や生涯の健康につながる子育て支援が行われている	年４回の５歳児健診では、保護者に健診の意義を伝えるとともに園医からの助言を伝え、保護者と子どもの発達について共有してきた。生活習慣や健康面等について、園で行っていることを具体的に知らせるようにしているが、子どもへの対応に不安を感じている保護者が増えているため、組織でのケースに応じた保護者支援が必要である **正：B　会：A　家：A**	A	A		・子どもへの対応に、難しさや不安を感じている保護者も増えてきているため、相談にのったり、ケースによっては組織での支援を行っていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	専門機関と連携し、専門的な援助が反映されたサポートプランが作成されている	専門機関と連携しながら、子どもの姿や支援方法について共有し実践してきた。しかし、サポートプランの作成に関しては、子どもの姿や伸ばしたいことの捉えに難しさを感じている職員もいた。研修等で学んだことを職員で共有したり学んだりする機会を計画に位置づける必要があった **正：B　会：B　家：B**	B	B		・各職員が、外部研修で学んだことを職員間で共有できるよう、園内研修の中で研修報告の時間を作る
5 組織運営	(1)組織体制の充実	進捗状況を確認し合いながら、効率よく業務が進められている	会議に参加していない職員への報告担当を決めたり、共有したいことを書き出すホワイトボードを職員室に設置したりして、職員間での情報共有はできてきた。しかし、業務へのスピード感の差が大きく、対応が遅れることがあったため、優先順位をつけることを意識したり会議で進捗状況を共有したりしていくことが必要である **正：B　会：B**	B	A		・分掌の進捗状況が分かるような表を作成し、会議時に定期的に報告し合う ・分掌の担当に偏りがないよう、運営組織表を見直す
6 研　修	(1)研修体制の充実	年齢や経験に応じた研修体制が築かれ、全ての職員が重点目標・研修テーマについて考えた援助をしている	職員一人一人が研修テーマを意識しながら子どもの姿を見ていった。表面の姿だけでなく内面の心の動きを捉え理解しようとするようになったが、‘出会い’‘経験’‘もっと’の図を使った子どもの姿の捉え方が全職員に周知できていないため、研修体制を工夫したい **正：B　会：B　家：A**	A	A		・主担任以外も、図を使った週案、日誌等を書く機会を作る ・研修に参加していない職員にも共有できるよう、職員室のホワイトボードを活用し発信する
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	子どもが自分で選ぶ・決める・考える・探す環境と時間が保証がされている	子どもの育ちつつある姿や経験させたいことを明確にし、子どもが自ら考えたり選んだりするのに適した量や種類を考えながら環境を準備してきた。素材や用具が豊富にあるが、保育者自身が教材の価値や効果的な利用方法を学ぶ必要がある **正：B　会：B　家：B**	B	B		・職員が園にある教材を知り、効果的な利用方法について学び活用したり、丁寧に園児や保護者に関わったりできるよう、主任会議を行い、園全体の状況を共有して足並みを揃えた実践ができるようにする
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	気軽に語り合える関係となっており、園からの発信後の保護者の受け止めまでを捉えて対応している	コドモンでの配信、写真を使ったおたよりや掲示、口頭での伝達と、場面や内容に合わせた発信の仕方を考え行ってきた。発信して終わりではなく、その後の受け止めや対応を職員で共有してきた。さらに気持ちや背景、プロセス等も共有し合えるきめ細やかな対応が必要である **正：B　会：B　家：B**	B	A		・それぞれの保護者に応じて、配信のお知らせだけでなく個別の声かけをする等、きめ細やかな対応をする ・関係づくりの難しい家庭ほど、より丁寧な目配り、気配り、心配りで、信頼関係を築いていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	目的を明確にした園児、児童、生徒との交流が行われ、育ちの連続性を情報共有している	静高、安東中の生徒の実習の受け入れや、連携園の子どもたちに遊びに来てもらうなどの交流を行った。また、近隣校の公開授業に参加させてもらったり園の公開保育に参加してもらったりし、お互いの教育保育ついて学ぶ機会を持つことができているが、普段から見学や施設利用をさせてもらう等園側から積極的にアプローチすることができなかった **正：B　会：B　家：A**	A	A		・学校の見学、施設利用、行事への参加等、年度初めに計画を立て、積極的に交流ができるようにする
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	活動の過程で地域との関わりが取り入れられ、地域のことを知る機会をつくっている	地域の資源を知る取り組みがなかなかできなかった。デイサービス施設訪問、図書館の団体貸出利用、移動動物園、環境学習指導員との交流など、今年度新たにつながることができたものも多かった。一度限りにならないよう今後も継続していきたい**正：B　会：B　家:B**	B	A		・地域にあるものを見たり、話を聞いたりして地域を知ることができるよう、園外保育に出かける計画を指導計画に取り入れる